

歴史に学ぶ

大阪経済大学特命教授・
経済評論家

岡田晃

第五十九回 武勇だけではなかった〜加藤清正が慕われるワケとは？

全国に「清正公」ゆかりの神社仏閣

東京都港区白金台の桜田通り（国道一号）と目黒通りの三差路交差点の横に覚林寺という寺がある。創建は一六三二年。加藤清正の位牌や像が祀られており、通称「清正公」。ただし読み方は「きよまさこう」ではなく、「せいしょうこう」だ。

中央区日本橋浜町にも、清正公寺という寺がある。これも「せいしょうこうじ」と読む。ここは江戸時代に肥後熊本藩主・細川家の下屋敷があった場所。加藤家の後に熊本藩主となった細川家は代々にわたって清正に敬意を払ってきたという。

全国的にも、清正ゆかりの神社や寺院が数多くある。熊本では当然のことながら、清正の人氣は格別だ。地元の人々は、とくに敬愛の気持ちを込めて「せいしよこさん」と呼んでいる。

清正と言えば、朝鮮出兵の際の戦いぶりや虎退治など、勇猛果敢な武将として有名だ。だが武勇だけで、それほど慕われる存在になるだろうか。

清正にはもう一つ大きな功績があったのだ。

秀吉に仕え数々の武勲 大名に出世、熊本城を築城

清正は一五六二年、尾張国中村（現在の名古屋市中村区）で生まれた。豊臣秀吉と同じ出身地だ。清正と秀吉の母親同士が従姉妹（または遠縁）だったという。その縁から十二歳の頃、秀吉に小姓として仕えるようになった。ちょうど秀吉が長浜城主となって城持ち大名に出世した頃だ。以後、秀吉の毛利攻めや、明智光秀を破った山崎の戦いなどで、次第に頭角を現していく。

そして本能寺の変の翌年（一五八三年）、秀吉が柴田勝家と雌雄を決した賤ヶ岳の戦いで敵將を討ち取る武勲を挙げ、「賤ヶ岳の七本槍」の一人として名を上げた。秀吉の天下獲りに向けた決戦で大きな貢献をしたわけで、その功績により近江国などの一部三千石を与えられた。

一五八五年、秀吉はついに関白に任命され、事

実上の天下人となる。それに伴い清正も従五位下・主計頭に叙せられ、一五八八年には肥後国北半分一九万五千石を与えられた。大抜擢である。二十七歳の時だ。

こうしてみると武勇のおかげで出世したイメージだが、それだけではなかった。実は、豊臣家直轄地の代官を務めるなど、行政面での実績も挙げているのだ。肥後国では、前領主の佐々成政が検地を強行して国人（地元の有力な豪族など）の反発を招き大規模な一揆が起きたが、成政は鎮圧に失敗し改易させられた。このような肥後情勢を安定化させるため、秀吉は清正の行政手腕を見込んで同国の北半分を任せただった。

肥後に入った清正はまず隈本城（当時の名称）の大改修に着手する。城郭を拡張するとともに、石垣や数多くの櫓、そして天守閣の築造を進めた。改修というより、築城と言えるスケールだ。

完成は一六〇七年で、熊本城に改称した。その後、江戸時代を通じて改修や増築が続いたが、基

本的な姿は清正によって作られたものだ。

周知のとおり、熊本城は二〇一六年の熊本地震で甚大な被害を受けたが、二〇二一年に天守閣が復旧した。雄姿を取り戻した熊本城は復興のシンボルであり、地元の人たちの心の拠り所となっている。その意味でも清正が残した功績は大きい。

河川改修・干拓で農業生産をアップ 最新技術で成長投資、経営基盤強化

さて、熊本城の築城と並行して、清正は大規模な治水・土木事業にも力を注いだ。

代表例が河川の大改修だ。従来は、白川と坪井川という二つの川が城のすぐ近くの市街地で合流していたが、しばしば洪水を起こしていた。そこで、二つの川の流れを分離する付け替え工事を行い、二つの川の間には石造りの堤（石塘）を築い



た。合流地点は城から離れた下流に移した。それにより氾濫を防ぐと同時に、城の近くを流れる坪井川を内堀に、遠くの白川を外堀として活用した。さらに城下の物資運搬など水運の利便性も向上させ、城下町の経済発展にも役立てた。

白川は、阿蘇山の火山灰を含む土砂が流れてきて川底に堆積し、洪水の一因にもなっていた。そこで、下部に穴を開けた多数の隔壁を水路にそって連続して並べた（鼻ぐり）。上流から流れてきた水が隔壁にぶつかり渦が出来ることで、底の土砂を巻き上げ、水と一緒に川下に押し流していく仕掛けだ。

また水流の速度を緩和して川岸を浸食から守るため、川岸から川の中央に向かって直角につき出す形で石を積み上げた堤（石剣）を築造した。

こうした工夫は領内の他の河川でも取り入れた。護岸の石垣の内側にも石垣を築いて二重にした例もある。清正の時代から約二百年後、その護岸が洪水で崩れてしまったが、そこにもう一つの石垣が姿を現し、地元の人たちは清正の用意周到さに驚き感謝したという話が残っている。

いずれも当時としては先進的な技術で、四百年も経った現在でも使われているものが多い。河川工事のモデル的な存在にさえなっている。

清正はこれらの工事にあたって自ら船に乗って川を何度も往復して検分したという。工事は農民を動員して進めたが、農繁期は避け、給料もきちんと支払ったため、領民は喜んで協力したと伝わっている。

河川改修とともに、灌漑用水の整備や海岸地域

での干拓も広範囲に進めた。その結果、熊本平野は肥沃な農地に生まれ変わり、農業生産は飛躍的に増加した。関ヶ原の戦いの後、清正は徳川家康から南肥後も与えられ五十四万石の大大名となるが、実質石高は七十九万石あったと言われるほど生産力がアップした。こうして多くの人々から崇められる存在となったのだ。

今日の企業経営に例えれば、一連の治水事業は成長のための投資であり先進技術の開発だ。それにより経営基盤を強化した。しかもそれらは領民、いわば社員や取引先、顧客などのニーズにこたえるものであり、四百年先でも通用するような時代を先取りしたものだ。

ただ清正は一六一一年、家康と豊臣秀頼の二条城会見に立ち会った後に、熊本に帰国し急死してしまう。まだ五十歳だった。一部には家康方による暗殺説もあるが、よくわかっていない。

清正亡き後は、息子の忠広が跡を継いだ。一六三二年に改易となった。謀反の疑いがあったとも、幕府が加藤家を恐れたためとも言われるが、これも明確ではない。

少なくとも、はつきりしているのは事業承継がうまくいかなかったということだ。それもまた歴史の教訓と言えよう。

岡田晃

（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授、同特別招聘教授を経て、同特命教授。新刊「経済で読み解く昭和史（PHP新書）」。